

令和元年度愛川町総合教育会議

令和元年12月9日

第 6 回 愛 川 町 総 合 教 育 会 議 会 議 録

- 1 会議日程 令和元年12月9日(月)
午後6時00分から午後7時40分まで
- 2 会議場所 愛川町役場4階402・403会議室
- 3 議 題 (1) 学校ICT環境の整備と活用について
(2) 温かい中学校給食の実施について
(3) その他
- 4 出席者 町長 小野澤 豊
教育長 佐藤 照明
教育委員(教育長職務代理者) 梅澤 秋久
教育委員 榮利 隆一
教育委員 平田 明美
教育委員 大貫 洋
- 5 事務局 教育次長 山田 正文
教育総務課長 亀井 敏男
指導室長兼教育開発センター所長 藤本 謹吾
生涯学習課長 上村 和彦
スポーツ・文化振興課長 松川 清一
教育総務課技幹 神崎 亜津子
教育総務課主幹 小島 亘
教育開発センター指導主事 板橋 康史
指導室指導主事 阿部 幸弘
中津第二小学校長 佐野 昌美

◎開会

○（亀井教育総務課長） 皆様、こんばんは。

定刻となりましたので、ただいまから愛川町総合教育会議を開催いたします。

進行を務めさせていただきます教育総務課長の亀井です。どうぞよろしくお願いいたします。

○（亀井教育総務課長） それでは、開会にあたり小野澤町長からご挨拶をお願いいたします。

○（小野澤町長） 本日は、総合教育会議ということでお集まりをいただきまして、大変にありがとうございます。

日ごろから委員の皆様には、本町の教育行政はもちろんのこと、町政の各般にわたりましてお力添え、そしてご理解をいただいておりますこと、心からお礼を申し上げる次第でございます。

また、梅澤教育長職務代理者におかれましては、9月議会におきまして、教育委員の再任の提案をいたしましたところ、全会一致で承認をされ、先月15日から引き続きご活躍をいただいているところでございます。これからもお力添えを賜りますようお願いを申し上げます。

総合教育会議につきましては、教育委員会と、行政が相互に連携を図りながら、一層の民意を反映した教育行政の推進をしていくために設置がされたところでございます。

次第にございますように、本日は2つのテーマで会議を実施させていただきます。

1つ目は、学校ICT環境の整備と活用についてを議題にさせていただきます。町ではICT環境の整備といたしまして、平成21年度からこれまで、町内の小・中学校に大型テレビを147台、携帯端末機を54台、そしてプログラミング教材60台などを整備してきたところでございます。ICTは授業の理解度を高め、子供の興味、意欲、こうしたものを引き出す1つのツールであると私は考えております。今の子供達が社会に出る時には、全ての仕事においてICTが必須となっていると、こうした重要性を理解していく必要があるのかなと考えておりますので、委員の皆様方には、いろいろなご意見をいただきたいと思っております。

そして、2つ目の温かい中学校給食の実施についてであります。ご案内のように、平成21年10月から家庭の弁当併用のデリバリー方式を実施しております。小学校と同様に、温かい給食を提供してほしいというご意見が親御さんや子供達からも多くあったところでございます。町としては、食の教育について、これまで鋭意、取り組みを進めてきているところであ

ります。後ほど事務局から説明いたしますが、これを進めてきた中で、大きな壁があったわけでございます。幾つか申し上げますと、小学校の給食室で調理した中学校分の給食を他校へ配送するということとなりますと、小学校の給食室が学校施設ではなく工場扱いとなります。また、高峰小学校の市街化調整区域内の問題、中津地区の学校については住居専用地域内にありますので、法的な問題が出てきたところでございます。

そうした中で、都市計画法や建築基準法上の問題を解決するために、教育委員会で2年間、県と調整を行ってきたところでございます。その結果、先般、神奈川県建築審査会、そして県の開発審査会より了承が得られました。まずは法的な大きな壁を取り外すことができたと考えております。

本日は、今までの取り組みから今後について、事務局から説明をいたします。実施に向けて、まだソフト面を含めて幾つか課題もあります。これにつきましても、委員の皆様から忌憚のないご意見、ご提言を賜りたいと考えております。どうぞよろしくお願いをいたします。

○（亀井教育総務課長） ありがとうございます。

それでは、議事の進行につきましては小野澤町長をお願いいたします。

○（小野澤議長） 議長の職を務めさせていただきます。

学校ICT環境の整備と活用について、藤本指導室長から取り組み状況等について説明をいただきます。その後、先進的に取り組んでいる中津第二小学校の状況について、佐野校長から説明をお願いいたします。

○（藤本指導室長兼教育開発センター所長） 学校ICT環境の整備と活用について、近年のICT環境整備の内容と効果等について説明をさせていただきます。その後、学校での活用等を踏まえ、先進的な取り組みを実施している中津第二小学校の佐野校長先生より発表をいただきます。

まず、ICT環境の整備の流れでございますが、平成21年に経済危機対策の1つとして提唱されましたスクール・ニューディール構想、この中にICT環境整備を推進するというものがございまして、この一環として小学校の普通教室に大型テレビ103台を導入いたしました。

また、平成26年には小・中学校のPCルームのPCをデスクトップ型からノート型に入れ替えを行いました。なお、そのうちの一部、各校6台につきましては、キーボードが脱着できるタブレット併用型を配備したものとなっております。

そして、平成29年には、小中一貫教育の視点からも、中学校においても小学校と同様のICT環境を整えるべく、中学校の各教室に大型テレビを導入いたしました。さらに、手軽に扱えて効果が非常に大きい携帯端末機器、iPod touch及びApple TVを各校6台、計54台導入したものであります。

また、令和元年にはプログラミング教育の必修化を見据え、教材としてLegomindestormsを60台導入、さらには小学校教育用のPCをタブレット型、ノート型に入れ替えたと説明したものでございますが、こちらにつきましてタブレットに入れ替えを行いました。さらに中学校におきましては、ノート型PCを新しいものに入れ替えるとともに、加えてタブレットを各校に40台導入いたしました。

ここで、教育用コンピューター1台当たりの児童・生徒数につきまして、スライドに映っておりますのは平成30年度の文部科学省調査でございます。愛川町は右から2番目になります。平成30年の時点で生徒6.6人に1台のパソコンの配布となっております。グラフ中の緑の線が目標値とされている3クラスに1クラス分程度、つまり3人に1台のような整備計画、国が示しているものでございます。また、赤線が神奈川県平均ということで、当時は6.9人に1台でございました。

ただ、国が示した緑の3クラスで1クラス分ということでございますが、先月、11月23日には政府の経済対策としまして学校の情報通信技術化としまして、全国の小学5年生から中学3年生がPCを1人1台使える環境整備案というのも提示されてきている時代となっております。

ちなみに、令和元年度の本町のPC整備をもとにして計算しますと、現時点では、小・中学校合わせると4.97人、約5人に1台の整備となります。データは違いますが、全国平均の5.4人に1台よりは少し環境が整ってきたと考えるところであります。

それでは、それぞれの整備の中でどのような活用がされたか、またどのような効果があったかを簡単にお話をいたします。

まず平成21年、小学校の各普通教室での大型テレビの導入でございます。例えば、大画面に書画カメラをつなげてノート指導をビジュアル化しています。特に低学年は、マスのどこから書くのか、計算の数字を合わせる等が説明だけではわかりにくいいため、実際にその場でテレビ画面に映しながら、ノートの指導をすることでわかりやすく、見やすいノートが全員とれるというような効果があります。また、デジタル教材の充実に伴い、それを用いて大画面に映すことで、より興味、関心が湧く、あるいは理解が深まるといった授業が行われてお

ります。さらに、テレビの入れ替えによって大画面になりましたことで、教育番組の視聴やインターネットのコンテンツ利用などが快適に行われるようになりました。クラスの一番後ろでも見やすい大きさでの投影等が可能になりました。教室には常に大型テレビがありますので、児童が作成したのものを使った発表なども行われています。

次に、平成26年、小・中学校の教育用PCをデスクトップ型からノート型、タブレット併用型に入れ替えたことについてでございます。これは脱PCルーム、つまり今まではPCを使うのであれば、PCルームに行くしかなかったものを教育のニーズがあるところにPCを運ぶことができるようになり、飛躍的に利用範囲や内容が変わったところでございます。また、デスクトップ型でなくなったことで、PCルーム内の机、椅子についても可動式のものとなりました。一斉学習型でなく、グループを作ってその中での学習形態にもPCルームが利用できるようになったというところも大きな効果でございます。

次に、平成29年度、中学校の各教室に大型テレビを導入いたしました。中学校でも、小学校と同じような授業ができるようになりました。

i P o d t o u c hとA p p l e T Vの導入については、教員が作成した教材を授業で映すこともあります。またはA、B、C、D、E、F、このような活用をされている学校もあります。このアルファベットを選んで開く、このような教材を作ることもございます。

今回はこちらでアルファベットを開けますが、Cを押すとCが開きます。グループ学習では、子供達がi P o d t o u c hを使い、例えば英語学習では、スピーチをした時に、録音をして自分達の発音を聞いてみる、それから体育の授業で自分の技や体の使い方などをその場で録画して再生をして役立てる、またそこで動きを確認して次の運動をするというようなことにも活用しております。

もう一つ、Fでございます。これは事前学習に使います。特に、特別支援学級等で効果が大きいのですが、初めて行く場所や予定にないこと、急に示されたものに戸惑いを感じるお子さんも大勢いらっしゃいます。そこで、行く先のものを事前に写真を撮り、駅での行動の手順などを作成して、その場にいるかのような体験をしながら、その画像を用いて事前学習を行うことで校外学習をよりスムーズに行うというようなことにも活用されております。

他のアルファベットを開けますと、課題や目当てを大きく提示しています。これは、黒板を使わずに課題や目当てが常に画面にありますので、授業中に目当てに立ち返ることが容易になるというような使い方です。児童自身が動画・録画もできますので、プレゼンテーションを携帯端末にまとめて皆の前で発表するといった活動、また、非常に簡単な使い方ですが、

大画面で画像、動画を見せるといった活用です。教科書の発行社によりましては、国語の読み物教材と関連した動画なども豊富にあります。それを画面で見せることでより一層興味、関心が高まるといった効果も 있습니다。当たり前の使い方ですが、ポイント等を大きく示し、子供達が集中して活動できるようにするといった工夫等も 있습니다。

このような形で、平成29年までの導入に伴って、各学習活動等は行われてきたところになります。令和元年のプログラミング教材、L e g o M i n d s t o r m s 導入及びタブレットに入れ替えたことによります活用や効果等につきまして、これより佐野校長先生から説明をお願いいたします。

- （佐野中津第二小学校長） それでは、引き続きまして、I C Tの活用について、過去、現在、未来ということで、この10年間のお話をさせていただきたいと思ひます。

まずは過去ということで、大型モニターと携帯端末機、それからパソコン教室の活用についてお話しします。

知的障害、発達障害、外国籍の子供など、支援を要する子供達がたくさんいます。いろいろな統計がありますけれども、最近では各クラスで20%ぐらい、つまり6人から8人ぐらいいるのではないかとされています。こういった子供達に共通して苦手な学習活動があります。お分かりになるでしょうか。話す、聞く、書く、読む、いろいろありますけれども、実は聞く活動です。こういった子供達は、先生が話すほど分からなくなってしまう。ですから、これからは目で見てわかる授業が非常に必要だと言われております。

そこで、I C T機器を活用して先生達がいろいろな工夫をしています。

例えば国語の授業です。書き順やプレゼン教材をテレビで映しています。パソコンやi P o dと連携して大型テレビで視聴するという形です。算数の授業では、解き方をi P o dでビデオを作成し、その状況をテレビに映して説明や解説をするといった使い方もあります。

理科です。アサガオの実物を拡大して観察のポイントを子供達に教えています。触ってみよう、葉の筋はどういうふうになっているかな、どういう模様かなど、実物を投影しながら説明をしています。

社会科です。G o o g l eマップで校外学習先の予習、先ほど藤本指導室長がお話ししていたとおり、特別支援学級の子供達が神奈川県警に行く際に、G o o g l eマップで日本地図から神奈川県、神奈川県から横浜市とだんだん近づいていって、神奈川県警はここにあるよと建物を見せて、実際に道路を画面上で歩いてみせる。子供達は、地理的な感覚を学ぶことができ、こういったところを見学するかという事前学習もできます。

続いて、英語です。Y o u T u b eのおもしろ動画で動機づけということです。世界のナベアツです。3の倍数と3のつく時だけ阿保になるという動画を子供達に見せて、ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックスとって、3の倍数や3のつく英語だけ阿保になる。動画での子供達の動機づけをしていました。

道徳です。教科書の挿絵を提示しています。

音楽では、楽譜を拡大して演奏ポイントの周知をしています。

図工では、自分の顔写真にコンピューターで描いた夢の帽子を画いて印刷。

総合的な学習の時間です。アプリで50周年記念のロゴマークを作成しています。

これは今年の新しい取り組みです。熱中症を予防するために、外での応援団の練習を少なくして、応援団の動画をテレビで見ながらエアコンが設置してある教室で練習するというものです。

現在です。来年度からプログラミング学習が全面実施、必修化されます。本校では、2018年度から2年先行して実施してまいりました。なぜ、プログラミングを学ぶのかについて触れたいのですけれども、実はこんな裏の話があるようです。

世界時価総額ランキングということで、企業の時価総額、企業の価値、これが平成元年、ベスト10に日本の企業は何社入っていると思いますか。ベスト10に7社入っています。では、ベスト50に幾つ入っているか、数えてみてください。数えられませんよね。実は、ベスト5は独占していますし、ベスト10に7社、ベスト50に何と日本の企業が32社も入っていました。それから30年後の平成30年、ベスト10に何社入っているのでしょうか。ゼロです。では、ベスト50に幾つ入っているか数えてください。35位にトヨタ社1社のみです。これだけ30年間で企業の価値が変わってしまいました。ベスト5に注目してみたいと思います。A p p l e、A m a z o n . c o m、アルファベット、マイクロソフト、フェイスブック、アルファベットというのはG o o g l eのことです。これらが世界のベスト5の企業です。全部インターネット関連会社、I C Tに関する企業になっています。

この数字は何だか分かるでしょうか。実は、この会社を立ち上げたC E Oの年齢です。20代前半で会社を立ち上げている。ということは、早い時期にこうしたI C T、インターネットを学ぶ、それが来年度からプログラミング教育が必修化されるもう一つの大きな理由だそうです。

では、どんなことを具体的にやっているのか。先生達は、この2年間で延べ25時間以上勉強しています。

具体的には、1年生でビスケットというソフトで海の生き物を画いて動かし、最後に天井にプロジェクターで映し、プラネタリウムを見るように1年生の子供達が喜びました。2年生では、プログラミングゼミというゲームのような形でプログラミングのつくり方を学び、ビスケットというソフトで世界に1つだけの花をつくり、最後に歌を歌うという、そういった勉強です。

3年生です。ビスケットでオリジナル水族館の作成。

4年生、スクラッチで47都道府県名と場所の学習。

5年生、メッシュという電子タグ、これを使って電気の利用に関する発展学習、Mindstormsで迷路を走る車ロボット、教育委員会で買っていただいたMindstormsを非常に活用させていただいています。また、スクラッチで倍数の理解と習熟。

6年生は、さまざまなプログラミングアイテムで感謝の集いを行います。Mindstormsで宇宙エレベーターを作成。人に見立てたピンポン球を2メートル上にある宇宙エレベーターにMindstormsで運ぶ、そういった勉強です。また、総務省の委託を受け、放課後ICTクラブを作っております。ここでは、ビスケットでオリジナルゲームづくり、WeDoで事故が起きない自動車づくり、こういったものに取り組んでおります。

未来といっても、近未来です。子供1人1台のタブレット、GIGAスクールネットワーク構想というものが打ち出されています。1ギガの大容量のインターネットでつながるようにしていくということです。令和5年、つまり2023年度までに1人1台のタブレットの整備をすると政府は言っております。

そこで、もしタブレットが導入されたらどんなふうに活用するかということですが、例えば本校では、さまざまな委託を受けて、タブレットの先行導入をしていました。ここに書いてあることを全て取り入れた、例えば国語の教室でネット検索をしながら意見文の作成、例えばクールジャパンに興味を持った子供がアニメについて調べて意見文を書く、地球環境問題に関心を持った子供が酸性雨について調べて書く、そういったことをやっております。また、電子教科書の利用については、国語の授業において教科書の説明文を切ったり書き込んだりして自分の考えを求めていくという学習に活用しています。

それから、教師、児童・生徒間のコミュニケーション。これは子供達の意見を瞬時に一覧表示、タブレットに意見を書くと、その瞬間に画面表示されます。多い意見ほど中心に大きく表示されるというものです。これは4年生がつくったお米を誰が食べるかという意見集約をしたところ。同じくこれも、表示された本の意見を求め、隣の人と意見交換をすると

いうもので、地球温暖化を防ぐためにどのような方法があるかということで意見をまとめた後、話し合っている様子です。

その他というところも、さまざまな取り組みをしています。例えばこれは、書き順をチェックする i P a d での漢字練習です。これは i P a d を楽器にして合奏をするというものです。1つ動画を見ていただきたいと思います。今年度の連合音楽会での様子です。一番後ろの列が i P a d を持つ子供達です。

(動画視聴)

○(佐野中津第二小学校長) 賛否両論あるかと思います。これは合奏ではない、音楽ではない、それも正しいと思います。練習を繰り返して技術が上達してこそ合奏だ、そういう考えもあるかと思います。その一方で、高価な楽器を買う、楽器の演奏経験が必要だとか、長時間の練習が必要だとか、そういったものなしで、いつでもどこでも誰でも楽しく合奏ができる、こういう面においては、i P a d での合奏というのは、小学校段階の音楽ではありなのかなと思っております。

また、本校には外国籍、外国につながりのある子供達があります。こういった子供達に対して、翻訳をしながら習字の指導や翻訳をしながら日本語の習得、こういった形でも活用しております。

先ほども話がありましたけれども、体育の時間、録画をしてフォームや作戦を確認する、こういった形でも活用しております。実際に、自分の走るフォームを録画し、ボルト選手と比較する試みも行いました。

それから、いろんなサイトから炊飯器の使い方をプログラミングで学ぶという活用もありました。

来年度から、小学校は新しい教科書に変わります。そのサンプルを用意しました。教科書には実はQRコードがたくさん掲載されています。教科によっては100カ所ぐらいQRコードがあります。それをどう活用するのか、最後に3分ほどご覧ください。

(動画視聴)

○(佐野中津第二小学校長) このような形で、ICTの活用に学校を挙げて努めておりますけれども、同じように大切にしているものに触れておきたいと思います。

実体験、これを大事にしていきたいと思います。ICTの場面だけをのぞいているだけでは学びにはならないからです。五感で学ぶ、これも大事にしたいと思います。においを嗅いだり、手ざわりを感じたり、音を感じたり、それも大事にしていることです。また異年齢交

流、こうした人との触れ合いも大事にしております。

最後になりますが、本日の日本教育新聞にこういった記事がありました。ご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、PISA、世界の学力調査です。日本の読解力が顕著に落ちてしまった。これはなぜかという考察が書いてありました。読解力といっても、文を読むことではないんです。さまざまな資料を読み解くということです。その理由は、ここに書いてあります。デジタルで学習が少ないということです。日本がOECD加盟国でデジタルを使った学習が一番少ないそうです。他の国はデジタル、つまりICT機器を使ってもっと勉強しています。日本は少ないんです。また、こうも書いてありました。ネット時代への対応の遅れです。つまり、1つの文を何度も読むというよりも、今はさまざまな情報を不確かなものか、そうでないものかを見極めながら読んで比較し、自分の考えを持つ。そうした学習が必要だと書いてありました。

これを読んで、ダーウィンの言葉を思い出しました。最も強いものが生き残るのではなく、最も賢いものが生き延びるのでもない。唯一生き残るのは変化に適応できるもののみである。絶滅危惧種に子供達がならないように、私達教師もならないように努めているところです。

ご清聴、ありがとうございました。

○（小野澤議長） ありがとうございました。

学校も変わってきたと思い、驚きました。

いろいろ紹介がありましたが、子供達の反応はどうですか。

○（佐野中津第二小学校長） 子供達はとにかく楽しい、これが一番の感想です。プログラミングにつきましては、さらに感動、歓声、拍手、励ましが起きるのが特徴だと思います。ある目標に達成できるかどうかを皆で協力してやっていくところがプログラミング教育の特徴ですので、励まし合って、できると歓声などがたくさん出てきます。

○（小野澤議長） 小学校でのランチミーティング、中学校でも昔は話だけでしたが、画像を見てもらいながら話をすると、子供達の目が全然違う。学校の活動内容などもあの大きな画面を使って給食を食べながら見せてもらい、子供達が随分活動的にやっているなという印象を受けました。

日本は2016年ぐらいから、日本再興の戦略をつくった時に、このICTを小・中学校に広げようということで、2020年までに100%にするだとか、そんな目標を立てていたでしょう。でも、まだ全然届いていない。

藤本指導室長と佐野校長先生から学校現場の状況をお話していただきましたけれども、皆

様からのご意見を伺いたいと思います。よろしくお願ひいたします。

- （大貫委員） 中津第二小学校の先進的な取り組みを聞かせていただき、本当に素晴らしいと思います。ぜひ、子供達がいる保護者だけでなく年配の世代にまで、こういうことを実施していることを知らせるべきだと思います。それが町の自慢にもなるし、町に住んでいる誇りにもなる。町外へも発信し、それを見た人が、そこまでやっている学校があるのかと、うちの子供は愛川町へ、わざわざ転入しても行かせましようとなるように、ホームページ中心のPR活動になるかと思いますが、実施していくと良いと思います。

佐野校長先生が言われたように、まだまだ日本全体で取り組みが少ないということ、本町に例えて言うと、お金の出どころがないわけだから、予算について町民の方の理解を得るためにも、もっと充実させましようという意識を高めるためにも、PRをして、教育委員会だけでなく事務局でも取り組んでもらいたいなと思います。

- （小野澤議長） 教育の部分というのはなかなか見えにくいと思いますが、小中一貫教育をやっていますと言っても、果たして親御さん、家族の人はどのぐらい理解をしていただけるのかなと思います。愛川町はこういう教育の取り組みをしているんだよと積極的に情報発信をしてもらいたいと思います。

大貫委員からご意見ありましたけれども、事務局で何かありますか。

- （佐藤教育長） 大貫委員が言われた点につきましては、中津第二小学校は2年目となりますが、1月24日に県内の各教育委員会や学校へ研究発表の通知を出していただき、多くの方が見学に来ていただけていると思っています。町としては、他の5校の小学校へも中津第二小学校の先行研究を参考にしてiPadやタブレットの使い方など、今の説明にもあったように、他の学校にも知らせながら、各学校で取り組んでいただき、さらには地域の方にも知っていただくことがとても大事だと思っています。

以上です。

- （榮利委員） 私が一番驚いたのは、学校のホームページです。教育委員会で専門に指導する人を設置してから約2年経過しますが、学校のホームページがとても統一されています。小学校だけでなく中学校でも様式が統一され、非常に見やすくなっています。町ホームページの町長の「折々の記」のように、本当に毎日いろんな内容が掲載されています。ICTの整備を進めていくということで教育委員会も力を入れて指導しながら、いろんな形で統一化を図っていくことが重要だと思います。
- （小野澤議長） ホームページは、各学校で作成しているの。

- （佐藤教育長） 基本的には各学校で担当が入力しています。
- （小野澤議長） 校長先生が更新しているの。
- （佐藤教育長） 一般の先生ではなく、メインは校長先生が入力している学校が多いです。
ホームページ作成の指導者として教育委員会からICT支援員を派遣していますので、活用していただき、各学校でブログを更新しています。例えば、修学旅行へ行き、到着したら更新、活動している様子もタイムリーで掲載する。その結果、アクセス数が非常に伸びています。
- （榮利委員） 学校訪問で聞きましたが、中津小学校の校長先生が、修学旅行の写真を保護者用に張り出すと、すぐになくなると言っていました。そのため、ホームページに写真を載せて見られるようにしたそうです。
- （大貫委員） こういうふうに勉強している子供達は、例えば10月の小学校に年配の方々が来て昔遊びを一緒にやる、逆に子供達が年配の人や保護者に教えるようなことまで発展をさせていってもらいたいと思います。そうすれば、プログラミング教育の本筋をそこで実現できるのではないかと思います。器械の操作を勉強し、さらに伝えるというところまで子供達がやるといいなと思います。そういったようなところまで、取り組みを発展させてもらいたいです。
- （梅澤委員） 大貫委員の考えに全くの同感です。佐野校長おっしゃるとおり、視覚教材を見ることは聞く学習に比べて4倍の効果があるとされており、ただし、聞くだけの学習効果は残念ながら5%です。つまり、視覚教材を見たところで、残念ながら20%程度の理解しかできない。それをどう捉えるかです。ただ聞かせるだけよりも見せた方がいいのか、でも、20%です。つまり20%で足りないところをどうするか。それが佐野校長のプレゼンの最後にあった、実体験を大事にするというところだと思います。実体験は75%程度の学習定着度があるとされています。

しかし、それよりも一番学習定着度が上がるのは、他者に教えることです。これは90%の学習定着が働きます。例えば学力状況調査で、地域ではなく国として相変わらずトップにあるフィンランドなどは複式学級、つまり小学校3年生と4年生が同じになります。新入りの3年生は4年生が教えてくれるけれども、3年時によく分からなかったことが、4年生になった時に、今度は自分が後輩に教えないといけない必然があります。 *Less is more* というらしいんですけども、少ないことを教えてより一層、*more*、もっとの定着度を図るというふうな教育方法をとる。つまり、他者に教えるという経験が、決定的にこれから重要になるだろうと思います。もし異年齢で、むしろ昔は年配の方から教えてもらうこ

とが当然の教育のシステムだったものが、それが逆転できたりすると、地域の互惠性というのでしょうか、いつも見守ってもらっているおじいさんやおばあさんに、僕達が学んでいるこれからの時代の生きるツールをという形で、お互いに教え合う。そんな関係があると素敵だなと思いつつ伺っていました。

- （佐藤教育長） 佐野校長からお話のあった現状について、これまで学校訪問をしても分からなかったのですが、ここまでできているなら他の学校にも十分浸透させて、より多くの i P a d を購入し、増やしていけると教育の効果が高まるのかなと思います。もう一つは、佐野校長からお話があったように、日本の子供達のデジタルにかかわる時間が少ないという点です。20ポイントくらい少ないのではないのでしょうか。日本の子供達はゲームに使っているようですが、海外では、パソコンを使いながら調べたり、映像を見たり、勉強の時間に使っているようです。愛川町の子供達もゲームに時間を費やしているようなので、切り替えられたらさらに成長するのかなと思いました。ぜひ、今後 i P a d の活用を推進していきたいと思っています。
- （小野澤議長） 今回の国の補正で、26兆円の補正をしたけれども、そのうちに入っていないの。
- （藤本指導室長兼教育開発センター所長） 入ってくる予定ですが、詳細情報がありません。ただ、小学5年生から中学3年生までを全部国が、交付税ではなく特別に何かをするという話は出ておりました。
- （小野澤議長） 教育委員会でも情報把握に努めてください。
- （佐野校長） その際、ぜひネットワークの整備をお願いしたいと思います。ボトルネック減少といって、幾ら i P a d を増やしても、ネックがせまいと繋がらなくなってしまいます。そちらの整備もよろしくお願いします。
- （佐藤教育長） 今、愛川町に入っているのは30メガバイトです。30メガバイト以上とよく言われていますが、佐野校長が言われたのは、ギガですね。
- （佐野校長） G I G A スクールネットワーク構想はそうです。文部科学省が1ギガ、もしくは100メガで繋がるようにということです。
- （佐藤教育長） 今の3倍以上になります。
- （藤本指導室長兼教育開発センター所長） その整備も、今後3年間ぐらいの間で全国的にという話ですけども、まだ詳しい情報は入って来ていません。
- （梅澤委員） もう一つよろしいですか。テレビでもよく取材を受けている麴町中学校では、

A I 教材のキュービナを入れて、数学の学習定着度がかなり高まっているそうです。しかも、自分でA Iを相手にタブレットでどんどん学習していく。正解ならば次に進める、不正解ならば、どこが間違っているかを教えてもらえる。だから、個別の先生がついている状況です。となると、半分ぐらいの時間で学習時間が済むそうです。

この学習のポイントとしているのは、ただ効率的に学習するだけではない。効率性は重要なことではあるけれども、効率化だけではなく、その空いた残り時間でどのように創造性を育むか、これがさらに重要だと考えて取り組んでいるんですね。なぜかという、先ほど出てきたG o o g l e、A p p l eやフェイスブックの人達は、プログラミング教育を受けていないと思います。彼らは創造性を自分達で働かせて、S o c i e t y 4.0を創造している。新しい時代に何をつくったらいいのかということ、自分達がつくり上げる力を育ててきたから、どんどん社会の変革自体を起こすことができていると考えた方が納得できる。つまり、A Iは活用するけれども、A Iの中だけにとらわれない、A Iを超えたプラスアルファの創造性を発揮させるような、そういう教育がまさに求められていると思います。

1月24日、残念ながらお邪魔できませんが、私がもしお邪魔するならば、そういった視点で質問をしたいと思います。つまり、これを使うことによっていろんな効率が上がる、プログラミング教育、少し全教科とは違った形での教育方法については、ああ、なるほどなど。でも、教科の中で、あるいは全教育活動の中でどのようにこれから必要な創造や協同性を発揮させているかということ、それがむしろ社会がどう変わろうが、i P a dがどう進化していこうが、ネットワークがどう変わろうが、絶対的に変わらない。つまり変化に合わせて、未知の状況に対してどういうふうに対応できるかという、その思考力が重要であると思います。その辺についても、ぜひこれから中津第二小学校で研究していただけると、まさに日本全国に発信できる、質の高い先進的な研究になると、私は大きな期待をしています。

こう言ってあれですけども、町の小学校で、本当に先進的なことをやっていると思います。その期待はとても大きいと思うので、その期待に沿った成果があると、さらに予算がつくのではないかなと思っています。以上です。

- （大貫委員） 私は、もっと将来を見ていいと思います。この教育を受け、身につけ、社会人になって、これからはテレワークの時代になるから、町外に出る必要がなく、町に永住していく人は増えると思います。
- （小野澤議長） がらっと変わりますよね。
- （大貫委員） 町の人口減少を逆手に、この取り組みを推し進めて人口を増やしていき、そ

の子供達にも永住してもらおうようなところまでを見据えて、ここにもお金を投入すべきだと強く思っています。

○（梅澤委員） おっしゃるとおりですね。これほどネットワークが進んでいなかったら、横浜に引っ越していると思います。しかし、いろんなことがどこでもできる状態になっていますので、定例の教育委員会が終わった直後に、テレビ電話でゼミができるんです。わざわざ行かなくても済むような時代なので、ぜひこの町で育って愛川を愛する子達が、まさに愛川に残っても仕事ができる、そういう能力を、中津第二小学校が今進めている研究を中心に波及させていって、そういった子供達が残る、そんな形態にできると理想だなと思っています。

○（平田委員） このプログラミング教育は、思考力の育成というところから来ているんですね。先日の学校訪問で佐野校長には辛口なことを申し上げましたが、今日のプレゼンを拝見して、先進的なことをやっていたらいいなと思いました。あと1つ、教員でも全ての先生がプログラミングについて得意でいらっしゃるとは思えません。ICTや機械的な分野が苦手な先生はどうするのか、子供達は本当に学ぶ力を持っていますので、教えればすぐに分かると思うんですけども、そういうところの援護性をこれからも継続していただきたいと思っています。

先ほどの画像を拝見して、心が変わりました。本当にiPadを使って最先端のやり方を実践していらっしゃるということが再認識できました。これから算数、国語、理科、社会、英語の全科目にも使われるということですから、そういうところも力を入れて、どんどん取り組んでいただきたいと思っています。いろんな方に周知するというのも大事だと思いますので、よろしくお願ひしたいと思っています。

○（梅澤委員） 教員が、教える専門家から学ぶ専門家になると言われていますけれども、まさに社会の変化に合わせて教え方も変えたいと。さきほどの佐野校長の分析で、ほとんどの先生が出ていたのではないかなと思って見ていました。もっと言ってしまうと、同僚で、本当にプログラミングについて知っているのかなという先生も出ていましたので、そうやってOn-the-Job Trainingですね、現場で同僚性を発揮して、先生達も学ぶ専門家になる。その学んでいる姿勢が、子供達によく映ると思いますし、とても重要だなと思います。

○（榮利委員） この間、学校訪問へ行った時、以前よりも大型テレビやiPadを使っている授業がとても多かったんです。活用しているなと思い、嬉しくなりました。もっと進化してくると、子供達が1個ずつ使って授業ができる、またその授業をやることで先生も学習し

て、いろんな事例が出てくるわけだから、それを学習して、それを手順やマニュアルにするかは別だけれども、愛川町の中でどんどん広がっていけば、かなり進歩して良くなるのではないかと思います。

- （小野澤議長） 今の計画だと、どうなっているの。
- （佐藤教育長） 全ての学校に i P a d が40台入りましたので、それをどう活用するかというのを今後各学校で浸透させていくと。大型テレビ等の大型提示装置は全ての学校、中学校も入っています。これは第3期教育振興基本計画の目標にも到達しています。あえて言うのであれば、i P a d の活用を増やしていくということが、今、必要なのかなということ、そして佐野校長からも発言があったようにあわせて無線LANの配備を進めていきたいと思っています。
- （小野澤議長） LANを多く増やすの。
- （佐藤教育長） はい。今、40%ぐらい、普通教室で無線LANが……
- （小野澤議長） 事務局でよく調べておいてください。
- （藤本指導室長兼教育開発センター所長） 災害時にも役立つものでもありますので、そこも絡めながら、避難施設にも学校はあたりますので、考えていきたいと思っています。
- （佐藤教育長） おかげさまで他の市町村よりは進んでおります。
- （小野澤議長） 不得意な先生もいますよね。
- （佐野校長） はい。また、そういった先生達の意見とか反応も大事にしたいと思っています。
- （小野澤議長） 映像にありましたが、音楽自体は素晴らしいけれども、あれだけで和音が出る、1つ指で押すだけでギターコードが出ると子供達は飽きが来ないのかな。反応はどうですか。
- （梅澤委員） 入り口だと思います。自分が楽器に興味を持って、もっとやりたいとか、あくまでも入り口だと考えています。例えば、ピアノを何人かが習っている。でも、弾けるのは1人だけです。サブでもいいから弾きたいという子でも、なかなか音楽キーボードを持ち込むのは大変だとなった時に、比較的効率的に、おっしゃるとおり実体験で、実際に鍵盤を持ち込めるわけではないのですが、やはり音を出しているという間接体験は次につながる可能性があるのかなと思います。これでLAN整備をして、今度鍵盤も買ってほしいでは、町長も大変だと思います。限りある予算の中でどうみんなの成果を上げるかというところが落としどころの1つにはなるのかなと思います。

多くのアーティストが今電子機器を使っての作曲、果てには音響を使っていますので、それを考えると。

- （小野澤議長） 作曲など、そうだもんね。
- （梅澤委員） と考えると、時代に即した形の1つではあるかなと思っています。
- （平田委員） では、大事なことなので残りの部分もよろしく願いいたします。
- （小野澤議長） 時間も大分過ぎてきましたので、この辺でICTの関係は閉じさせてもらいたいと思います。

いろいろなご意見出ましたので、事務局で必要なところはよく整理させてもらって、予算を計上できるかどうかというのは別問題として、財政課へ上げてもらわないと土俵にも上がりませんので、どうぞよろしくお願いします。

続いて、2項目め、温かい中学校給食の実施について、事務局からご説明をお願いします。

- （亀井教育総務課長） それでは、引き続きまして、温かい中学校給食の実施について、私から説明をさせていただきます。

まず、本町の学校給食の変遷を書かせていただきましたが、昭和35年に小学校で自校方式の給食を開始し、43年に中学校で牛乳の提供を開始しています。また、平成17年6月からはお弁当を持ってこられない生徒への対応策として、業者弁当配送方式を導入いたしました。この方式は、民間業者の調理施設で調理した弁当を希望者が購入するという仕組みだったのですが、利用者が2%台と低迷し、採算が合わないということから業者が撤退する事態となって、平成19年3月末をもって終了となりました。その後、平成20年に学校給食法が改正され、学校給食を活用した食育への取り組みが要請されたことや、保護者の声などを踏まえて、平成21年10月から家庭弁当併用のデリバリー弁当箱方式の給食を導入したものであります。

現在の状況についてですが、まず小学校6校は、それぞれ自校で給食を調理しております。完全給食、パンまたは御飯、主食と牛乳とおかずがそろったもので、献立は町内全ての学校で統一です。調理は全て、6校とも民間業者へ委託しております。

続いて、中学校の現状ですが、3校とも、今申し上げたデリバリー弁当箱方式、民間業者が調理したものを中学校へ持ってくるという形で行っております。これも形式上は完全給食、パン、御飯、牛乳、おかずがそろったもので、3中学校統一した献立となっています。

この中学校給食見直しの経緯でございますが、学校給食を活用した食育の一層の推進を図ること、それと小学校と同じ温かい給食を提供してほしいという生徒、保護者、町議会からも要望がありました。また、平成30年10月に行われた子ども議会でも、その当時、小学生だ

った子が、中学へ行ったら小学校と同じ温かい給食が食べたいというような声も寄せられたところ。また中学校給食、今のデリバリー弁当箱方式は喫食率が非常に低い。これはおかずについては調理後、一定の温度に衛生上、冷やしてからでないといけないということで、3割程度の申し込みしかありません。

それで、見直しに当たって、実施方式、温かい給食を提供する方式としては、自校で小学校のように作る方式。ただこの場合は、中学校の敷地内に新たに給食施設をつくらなければならない。それから、センター方式。これは土地を確保して、センターを建設しなければならない。親子方式は、小学校の給食室で中学校分を調理して、中学校へ配送する。それからデリバリーでも、温かいまま食缶に入れて運ぶというやり方もあるところです。

親子方式による中学校給食を選択するに当たっては、ここに掲げております7つ、安全・安心な給食の提供、栄養バランスのとれた温かくておいしい給食の提供、望ましい食習慣の形成、食育の推進が図れる。原則、全員が同じものを食べる。初期費用、運営費用の抑制ができること。効率的で安定した運営、長期的な観点からのメリットが大きい。施設整備や運営方法について、町の財政状況や将来への負担を最小限とする、こういった観点を重要視いたしました。

ご存じのように、児童数は年々減ってきております。このグラフ、令和3年以降は推計ですが、平成29年の時点において、児童数の合計が約2,000人、平成元年と比較すると1,000人も減っている。平成20年と比較しても、もう500人減っている。この減少傾向には歯どめがかからない状況です。

同様に、中学校の生徒についても、平成29年時点において合計約1,000人、平成元年と比べると約1,000人減、小・中学校で合わせて3,000人が減ってしまったということでもあります。

こういったことを考慮しまして、児童数の減少で余裕が出てきた小学校の給食室を活用することが、最も効率的であり、親子の組み合わせを工夫することにより給食室の改修は必要だけでも、増築せずに済む、あるいは建物を建てなければいけないセンター方式に比べ早期実現が可能だというようなことで、親子方式が本町には適しているという結論を導き出しました。

この親子方式を実施するに当たって、どういった組み合わせがいいかといったときに、現状の小学校の調理室や調理機器の容量、中学校分も作るのに機器を増設しなければならないんですが、それが置けるかどうかというようなことを考慮して、中津第二小学校と菅原小学校から愛川東中学校へ、半原小学校から愛川中学校へ、これは1校で対応できると。高峰小

学校、田代小学校で愛川中原中学校分を賄うと、こういった組み合わせが本町にとってベストであろうという結論を導き出しました。

ただ、実施するに当たり、先ほど町長の挨拶にもあったように、法的な課題が出てまいりました。自分の学校の給食をつくる給食室が学校内にあれば、これは学校ですけれども、他の学校の給食をあわせてつくと、用途が工場として扱われてしまいます。この場合、中津第二小学校と菅原小学校は住居専用地域に建っています。高峰小学校は市街化調整区域というところに建っておりますので、県の許可がなければ工場は建てられないと、認められないということがわかりました。

それで、この法的課題をクリアするため、高峰小学校では都市計画法第43条の用途変更許可を、中津第二小学校、これは第1種低層住居専用地域とあって、最も建物が厳しく規制されているエリアです。菅原小学校は第1種中高層住居専用地域、こちらも建物の規制が厳しいエリア。ここについては、建築基準法第48条の規定に基づく特例許可を受けなければならないということになりました。

許可申請に当たっては、それぞれの学校の周りの住環境を悪化させるおそれがない、給食室から出る水質、騒音、振動、臭気、こういったものを測定して、悪化させるおそれがないというようなこと。また、交通量調査。この親子方式を実施にする際には、これまでも食材を運ぶ車などは小学校に来てはいたんですが、中学校へ運び出すと車が1台増える。この1台がどれだけ交通量として、その小学校周辺エリアに影響があるか、こういったことを調べました。また、法で規制があるということを証明しなければならないということで、町議会への説明、あるいは小学校が所在する春日台地区、上熊坂地区の役員会に赴いての説明、また該当する中津第二小学校、菅原小学校、愛川東中学校PTA役員会での説明、さらには町民の皆様意見に意見を伺うためにパブリックコメントを実施いたしました。

こういったものを踏まえて、前のところから話しますが、平成29年12月に神奈川県との協議を開始して以来、延べ40回を超える協議を重ねてまいりました。この結果、高峰小学校については本年の8月、開発審査会を経て許可を受け、中津第二小学校、菅原小学校についても、先月、11月の建築審査会で了承を得ることができ、町長がおっしゃった大きな壁を、1つ乗り越えることができたわけでございます。

現在の取り組みと今後のスケジュールであります。温かい中学校給食の提供に関する懇談会、これはPTA会長さんや母親委員さん、食育担当の先生、こういった方達を構成メンバーとする懇談会を立ち上げ、この親子方式について、どうやったらうまくいけると、

あるいは先進的に取り組んでいる中学校に視察に行ったところであります。また、中学校給食の運営に関する協議会、実際、中学校の日課とか給食時間の設定をどうしていこうというような協議を、これは学校側、中学校長であるとか教務主任であるとか学校の栄養士、こういった方達をメンバーとする協議会を別に立ち上げて、今、協議を進めているところであります。あわせて、小学校の給食施設は5校、改修しなければなりませんので、これの実施設計、詳細な設計を現在進めているところであります。

平成2年度には調理業務、それから配送の業務、こういったものの契約、それと調理機器、消耗品類、中学生の食器も買わなければいけませんので、こういった事業を進め、それから給食室の改修工事を実施に移すというようなことを踏まえ、令和2年度中には親子方式による中学校給食を開始したいということで、取り組みを今進めているところであります。

最後に、皆様にイメージを持っていただくために、先進的に行っている川崎市を視察した写真、逆光になって見えにくいところもあるんですが、配膳室で、1階のフロアにコンテナ、大きな銀色の入れものですか、あの中に食材も食器も全部入っています。こんな感じに入っています。左側が食缶、二重食缶といいまして、今温かいコーヒーなど持ってこられる方がいますが、あんな感じで二重になっています。それから、つくったものが2時間ぐらいはほとんど冷めないで、持っても熱くはないというようなもの。右側は食器ですね。それをコンテナに入れて、生徒がとりに来る時間に合わせてコンテナの扉を開ける。そこには人を配置して、万が一、遺物が混入されることがないように、そういった対策もとろうと考えているところです。

実際に、これは運んでいる風景ですが、子供達が協力して運んでいます。左側の写真の真ん中辺にいる子が持っているのが食缶です。実は本体だけで3キロ程度あるのですが、あの中に御飯、1クラス分が全部入ってしまいます。

○（小野澤議長） 上。

○（亀井教育総務課長） そうです。あるいはおかずも1クラス分、全部入ってしまいます。汁物もそうですね。入れたところで10キロ前後かなと思いますが、右の写真にあるように、廊下、あるいは階段を一方通行にするなどの工夫によって、事故が起きないように、落としたりしないように工夫をして、各教室に子供達が運んでいます。本町においても、こうしたやり方がいいのではないかと考えております。

食べ終わったものは、また食缶に戻して、最後、業者が引き取るという形になります。

以上、説明をさせていただきましたけれども、ハード面、ソフト面でまだまだ解決しなけ

ればならない課題があるわけですが、温かい給食の実現を心待ちにしている生徒、それから保護者、こういった方々の期待にこたえられるよう、これからも一層努力して取り組んでまいりたいと考えているところです。

○（小野澤議長） それでは、中学校給食の関係の経過を事務局から説明がありましたけれども、意見交換に入りたいと思います。よろしくお願いいたします。

○（大貫委員） 温かい給食について、子供達の要望、保護者もお弁当をつくらないでいいという点も含めて、大歓迎です。自分の経験を言わせてもらうと、お弁当の時代、お弁当を持ってこれない家庭もありましたが、意図的に持ってこない子もいました。要するに、親からお金をもらったなら他のものを食べたりして、弁当の時間になると、その子達はいないんです。当然、教員は指導に行き、その時間をとられてしまう。そういうようなことをお弁当の時代に経験をしました。

それで、今回のような温かい給食が運ばれてきて、学校で子供達が分けて食べるというシステムになったときに、先生方は、お弁当の時代の思い出もひっくるめて、何か変なものを入れるとか、途中で悪さをして意図的にひっくり返してしまうとか、そういうようなことが起きないかと心配をしました。ところが、実際には、どんな生徒も、食べるものに関しては一切悪さをしませんでした。やはり食べるということは、基本ですよ。だから、温かい給食をここで導入するということは、本当の教育的な効果を上げることだろうと、自分の体験からもつくづく思います。ぜひ早急に取り入れてほしいです。

○（小野澤議長） 大変貴重なお話をありがとうございます。しっかりと取り組んでいきますので、よろしくお願いいたします。

○（榮利委員） 小野澤町長も、ランチミーティングで小学校給食を食べて、美味しかったですよ。

○（小野澤議長） 美味しかったです。愛川町は小学校給食がおいしいと評判だよ。

○（佐藤教育長） 献立会議も毎月やっています。そこでは、反省も出ていますか。

○（神崎教育総務課技幹） そうですね。反省や振り返りをして、残さず食べてもらう工夫と努力をしています。

○（梅澤委員） いろんなところで給食をいただく機会がありますが、愛川町の給食は決定的に白飯だけがありません。必ず味がついています。白飯だったらふりかけなどを付けています。これはどこへ行っても聞いているんですけれども、どのくらい残りますかと聞くと、やはり白飯だけは残るということで、どの市も共通です。献立を考える方、あるいは調理され

る方達のご苦労があつての成果かなと思います。

そういう良いことが中学校にも広く普及をして、今のお弁当方式は、視察の際にいただくんですけども、教育長がお弁当もおいしいでしょうと言われるので、はいと答えますが、小学校給食ではないのかといつも思っています。恐らく生徒もそう思っているはずで、中学校での喫食率が3割にとどまっているというのがあると思うので、私の子供も、周りが頼んでいないから頼みにくいということも正直あるようです。でも、一律となると親も楽ですし、子供も、本当は頼みたかったけれども、頼めないという、頼みづらさという側面も全て解決できるので、もう一刻も早く実施していただけるといいなと思います。

- （佐藤教育長） 皆が同じものを食べられるよね。
- （梅澤委員） おっしゃるとおりですね。この同じものが、本当に栄養のバランスを考えられての同じものなので、これはとても素晴らしいことだと思います。
- （平田委員） 保護者の立場から言いますと、お弁当を作る方が大変です。どうしても子供は好きなものを親に要求します。給食になりますと、栄養バランスがちゃんと整っていますので、健康にもいいです。基本的に、学校の先生達はみんな体格がよくなり、栄養がしっかり行き渡っているということを聞きますので、とても良いということだと思います。特に、町長が温かい給食ということを話しておられて、希望どおりのイメージにはなったのでしょうか。
- （小野澤議長） 問題ないです。
- （榮利委員） この間、学校訪問へ行って気づいたことですけども、給食の時間に1年生に6年生が給仕に来ます。1年生の子供達に6年生がちゃんと給食を給仕しています。
- （梅澤委員） 配膳もしてくれたかと思います。
- （小野澤議長） どこの学校もそうでしょう。
- （神崎教育総務課技幹） 1年生の給食開始当時は、そうしています。または異学年交流などがあると思います。
- （榮利委員） 中学校も給食になったら、みんなが経験していることだから配膳はすごくいいと思いますね。
- （梅澤委員） さっきの話のところ、教える経験は90%の理解度になりますので。
- （小野澤議長） 田代小学校へ行った際、老人会の方が来られていた。同じ給食を食べていて、いいなと思いました。地元のお年寄りも喜んでいて、子供達も人懐っこく、とても良かった。

- （榮利委員） 給食は美味しいですね。
- （佐藤教育長） 中学校は初めてのことなので、先生方はかなり不安があります。私も経験をして、平成19年度に厚木市がスタートで、先生方も研修や小学校に見に行き、すごく心配していたら、何ていうことはなかったんです。子供達の方がよく知っていて、教員が指導しなくても、子供達は小学校でやっているからテキパキと動けます。そういう面での心配というのはほぼないのではないかなと思います。学校も、日課表については検討しています。これは近隣の学校で給食がありますから、参考にしながらやっていますけれども、1つ引っかかっているのが配送です。持ってきて、さっきの川崎は子供達が運んでいましたよね。それで、他のところでは、その階まで業者が持って行って、その階で子供達が自分のクラスに運んでいくというところもありました。その辺で、子供達の教育も含めて、子供達が1階から教室まで運ぶのか、フロアまで業者が運んであげるのかというのは、1つ検討の余地があるのかなと思っています。
- （小野澤議長） 親子給食は大きなお金がかかるので、中学生にこぼさないように運んでもらう。業者が2階、3階に持っていくと、人手も相当かかり、予算もどんと膨らみます。この辺はよく検討してもらった方がいいのかなと思います。
- （梅澤委員） 受け渡しまでは、必ず人がいなければいけませんよね。
- （佐藤教育長） ただ、先ほど大貫委員さんが言われたように、生徒が落ち着かない状況であったとしても、給食については、そういう子供達もきちんとできるという部分はあるのかなという思いはあります。
- （小野澤議長） 平田委員さん、何かご意見ありますか。
- （平田委員） カラーが違うから大丈夫だと思います。この間、持たせていただきました。事務局には大丈夫です、子供達に自分で持たせたらいいと言いました。そのぐらいやるべきですね。お金がかかるとか、そういう立ち位置ではなく、自分のものは自分でやる、共同作業も定着させることは大事だと思います。
- （梅澤委員） 日課が5分変わるかどうかなんですよね。上まで上げる、おろす、それで子供達が2分ぐらいずつやるので、いわゆる午後の日課が5分押すかどうかになります。そこを、うまく使えれば何とかなるのかどうか。
- （榮利委員） 今、中学校は大体同じ時間で12時55分から13時15分かな。それで、給食はというと、小学校は大体30分から、多いところで40分ぐらい。その時間を、これからどうするのか決めていかないといけないことだと思います。あと、時間をとってあげると子供達だっ

て経験があるからしっかりやると思います。

- （小野澤議長） 中学校はお弁当の時間がどれくらいあるの。
- （佐藤教育長） お弁当は15分で食べる。給食の場合、運んで配膳して片づけるのはその班の子だから、特に問題ないですね。多分、15分はプラスでとります。
- （小野澤議長） プラス15分。
- （佐藤教育長） 厚木市もそのくらいです。
- （小野澤議長） 給食の時間は、もっと長かったような気がする。
- （佐藤教育長） 子供達は大丈夫ですよ。ついていけないのは教員だけです。
- （梅澤委員） 厚木市は給食の時間をどのくらいとっているのですか。
- （佐藤教育長） 食べるのは15分、準備は15分、合計30分。
- （平田委員） あと1つ、アレルギーのことでお尋ねしたいのですが、小学校の場合、アレルギーがあるからということで保護者が先生に申し入れをしますが、中学校の場合はある程度、自分で取り除くのですか。
- （神崎教育総務課技幹） アレルギーの程度にもよるかと思います。自分で取り除いて食べられればいいですが、重篤な生徒さんに関しては、給食は難しいのかなと。
- （平田委員） 自宅から持ってくるということですか。
- （神崎教育総務課技幹） どうしても重篤な場合は、給食は難しい方もいらっしゃるかもしれません。
- （大貫委員） 導入当初から、導入時に町の基準を示して重度のアレルギーがある子には、お弁当を持ってきてもらうしか方法はないと思います。それをきちんと打ち出す必要がある。何でもかんでも受け入れたら、お金だっかかります。これは一種の福利厚生等の行政サービスです。だからといって、全部ひっくるめたら実施できないというところがあるので、やはり基準を打ち出すべきだと思います。言いづらくかもしれませんが、できないと言うべきだと思います。
- （梅澤委員） 程度にもよりますけれども、小学校は対応している場合もありますよね。
- （神崎教育総務課技幹） 変えることはできないので除去食ということで、除去のみします。
- （小野澤議長） 食べられないものを除去する。
- （佐藤教育長） 除去給食。個人の調査をして、細かく小学校はやっています。
- （梅澤委員） その対応は、中学校ではできない。
- （佐藤教育長） 中学校の場合は、まず詳細な献立を用意して、子供がそれを自分で抜いて

いくということでほとんどの子は済んでしまいます。本当にアレルギーがひどい子は、自分で取ることができません。そのお子さんに対してどうするかが今後の検討となります。

○（小野澤議長） よろしいですか。

事務局で何かありますか。

○（亀井教育総務課長） 特にございません。

○（小野澤議長） それでは、2つの議題については、ここで終了ということにさせていただきます。

また、今日の議論を生かして、子供達のための環境、さらには給食の関係について、教育委員会と一緒にしっかりと取り組みを進めていきたいと考えておりますので、よろしく願いをいたします。

本日は大変ありがとうございました。

○（亀井教育総務課長） ありがとうございました。

以上で全ての日程を終了といたします。